

うるし コラム 漆と日本人

古来から日本人は、漆を生活に利用してきた。現代でも使われる、箸、お椀や櫛、あるいは、さまざまな箱や家具、楽器ばかりでなく、弓矢、土器や丸木舟などの塗装などにまで使われていた。この他にも、陶器、磁器の補修など、様々な用途に使われている。この漆は、さまざまな寺社の塗装などにも多用されているが、その補修を行った際、中国産の漆を使った箇所が、数年後に剥げてしまった。これは日本産の漆でないと、湿度の高い日本の風土の中では、耐えられないということである。

これらの漆がいつ頃から使われていたのか、大変興味深いことである。以前は、約7000年前の中国の浙江省東部、新石器時代の、河姆渡（かぼと）遺跡で見つかった漆器が最古とされていたが、西暦2000（平成12）年に北海道函館市の垣ノ島遺跡から、約9000年前の漆塗りの副葬品が発見された。また、1984（昭和59）年に福井県若狭町の鳥浜貝塚より出土した木片が、約12600年前の漆の木であることが、2011（平成23）年の東北大学の調査でわかった。縄文時代から日本各地で漆を使っていたことは各地の遺跡調査の結果からわかるが、少なくとも縄文草創期から使われていた地域があることは確かだと思われる。

事実、日本国内では、伝統工芸と認められている漆器が複数ある県が多い。日本中で漆器を作ってきた伝統がある。ところが、埼玉県には、伝統的工芸と認められている漆器はないように思われる。しかし、大宮の氷川神社そばの寿能遺跡や浦和の氷川女体神社のそばの馬場小室山遺跡をはじめとして、見沼地区周辺から多数の漆製品が発見されている。その見沼地区の少し西側の、南鴻沼遺跡（さいたま市中央区大戸）では、2011（平成23）年から2013（平成25）年にかけて発掘調査が行われたが、約4903～4707年前の、漆掻きの掻き傷が残されたウルシの木が発見された。日本最古の、掻き傷の付いたウルシの木である。かつての大宮台地で漆の生産と加工が行われていたことは間違いない。

大宮台地は、当時、荒川水系と利根川水系が合流する場所であったため、秩父、群馬、栃木とも、船で行き来しやすかったと思われる。その中で、栃木県は今でもウルシの木を育て漆を生産している。秩父や群馬ではいつ頃まで、どの辺りでウルシの生産が行われていたのだろうか。遺跡等を調べて行くと日本では、多くの場所で漆器が見つかるので興味深いことである。

しかし、現在では、その日本産の漆の生産量も減り、後継者も不足している。その中で、鳥取県との県境に近い岡山県の真庭市や新見市でも、昭和40年頃からダム建設のため備中漆の生産量が激減してしまった。けれども、1994年から、ウルシの木の植栽地を守り、漆を生産、そして備中漆の再興が進み、県重要無形民俗文化財・郷原漆器も地元の漆で作られるようになってきている。日本各地で、このような再興が出来ていかないものかと思う。

（岡本 浩：会員）